

連載・転換期の公共事業⑯

いまこそ急務 「復元」の河川事業

ルポライター 滝川 康治



旭川では80年代からサケの稚魚の飼育・放流に取りくんできた。頭首工の一部撤去で成魚が帰ってくるか…

サケが帰つても
産卵環境に暗雲

備えた四メートル四方のブールを二列配置するスペースがある、延長百十メートルの構造物になる予定。

れると話が発展するのではないか」

月橋のそばに産卵環境があるのか、まだ調べていない。今後、古老人に聴いた通り、サケに詳しい人を招くなどして考えていく。市内で放流に取り組む者同士が集まり、産卵環境について考え方を話し合うようになればいい」と話すのは、守る会の「サケ・ゼミ」

「開発」の大義名分の下、蛇行した川を直線化し、コンクリートで固めてきた北海道の河川事業。河川法が変わって「環境保全」が盛られた現在、石狩川での堰堤撤去と魚道の新設、積丹川での魚の棲みやすい環境を創る試みなど、ようやく変化の兆しが見える。いまこそ生態系を復元する公共事業を積極的に進めるときだ。

魚の遡上を阻む 堰壊し魚道造る

深川市内の石狩川で行なわれている花園頭首工の撤去作業（右下）。来年には右岸側にイメージ図のような魚道が完成する。復元への第一歩だが、産卵環境づくりなど今後の課題も多い。人たちは、「竣工を境に旭川からサケの姿が消えた」と口を揃える。魚は、竣工時に簡易なものが造られが効果は不明で、七五年水害の復工事によって閉鎖されていた。

「石狩川にこそサケを呼び戻そう」を合言葉に、大雪と石狩の自然をなる会（寺島一男代表・旭川市）がサケの稚魚を飼育・放流する運動を始めたのは八〇年代初めにさかのぼる。バルブ工場の廃水や河川改修、農開発などで川が汚され、巨大な堰魚の行く手を阻む——高度成長時代に瀕死の重傷を負った石狩川の再生を願う活動だった。

「花園頭首工という魚道のないダムがあつて、（市内に）さくが一匹も

**破壊した生態系を甦らせ
画一的な工事に訣別を！**

石狩川の復元に向けた第一歩だ。

石狩川の復元に向けた第一歩だ。

An aerial photograph showing a coastal scene. A long, low-lying pier or breakwater extends from the right side of the frame towards the left, ending in a small structure. The water is a light blue-grey. On the land to the left of the pier, there are several buildings of varying heights, some with red roofs. Further back, more buildings and greenery are visible under a clear sky.

年には右岸側にイメー
今後の課題も多い
設が竣工した。往時の石狩川を知
人たちは、「竣工を境に旭川からサ
の姿が消えた」と口を揃える。魚
は、竣工時に簡易なものが造られ



大夕張ダムを水没させるタツガワダムの工事現場。人々の関心は薄い

高めることに役立った面はあるが、生態系に悪影響を与える、水辺から人間を遠ざけ、生き物が棲みにくい環境にしてしまった。石狩川のように、相次ぐ蛇行部のショートカットで百キロ近くも短くなった川もある。

技術力を誇る報告書はあっても、長年の河川工事が生態系に与えた損失や水質悪化の原因、投資効果などをきち

んと分析し、復元の方策を探った文書はあまり見られない。魚道設置や多自然型工法にしても建設省の指導や市民運動に触発されて始まつたものが多く、長い間、机上の計算による画一的な工事が続いてきた。

生態系を省みない河川工事を転換させることに弾みをつけたのが、九七年の河川法の改正であった。

そこでは、従来の治

水と利水に加えて「河川環境の整備と保全」

を明確に位置づけた。

さらに、河川の整備を進めるとときには住民や地方自治体の首長の意見を反映することも盛っている。「川のオーナーは住民であり、国や自治体は管理を任せられているだけ」という基本精神を明記したわけだ。これは、一八九六年(明治29)年の旧河川法の制定から百年にし

ての、画期的な方針転換である。

が、法改正で生態系を復元していく素地がでても、その精神は現場に十分浸透していない。「仮(法)作って運動に触発されて始まつたものが多く、長い間、机上の計算による画一的な河川改修やダム事業などを進める事が続いた。

事例は、いま各地に見られる。

巨大なタツガワダム(国内第4位の貯水量)を新たに建設し、すぐ上流にある大夕張ダムを水没させると、とてもない計画もある。開発局のバンフにはシユーバロダム完成後の青い湖面が描かれているが、実際には泥色に濁ったダム湖が出現し、現在もひどいタツガワの水質を悪化させる可能性があるのに、関心を寄せる人は少ない。

こんなことでは北海道の川は魅力ある空間として甦れない。再生のためには、直線化してコンクリートで固める北海道開発の歴史に訣別しかつての河川環境を本気で復元する時代ではないか。

「何年前の川に戻していくか?」は、それぞれの流域で議論して決めればいい。浜の母さんたちの「木を植えて魚を殖やす運動」に触発されて植樹に対する関心が高まっているが、まずは河畔林の再生を盛り、積極的に予算を投じるべきだ。アメリカなどは州が河

が、法改正で生態系を復元していく

畔林帯の幅を規定しており、ヨーロッ

パ諸国では十キロ単位で川の蛇行を元に定義している、と聞く。そうした事例に学ぶのも一つのやり方だろう。

河川審議会(建設大臣の諮問機関)

の小委員会は最近、河川工事に天然の材料などを使う伝統技術を普及していくことを盛った報告書をまとめたが、すぐれた伝統技術による復元事業を試みてもいい。生態系をつぶすダム事業を根本から見直すなどして、新たな事業に予算を振り向ける手もある。

北海道の公共事業は、必要性や投資効果の検証をおろそかにした、雇用や景気対策のためのものが山ほどある。しかし、ここで発想を転換して、「復元のための公共事業」を真剣に考えてみてはどうだろう。

破壊された生態系を回復させるには知恵も、技術も、時間も、そして力もかかる。復元に向けた仕事ならば、誰もが納得できるし、生き物にも歓迎されるだろう。もちろん、景気対策や地域の福祉向上への効果は、従来型の事業の比ではない。二十二世紀の北海道の事業に力を注ぐ時代でありたい。